島根の記憶 ④

島根町加賀

寄港地でにぎわった〝楼〟

石塀横の階段を上ると、空き地が広がり、夏草が覆っている。「ゴミを捨てないで下さい」との立て看板。ここに、かつて大いににぎわい、小泉八雲も旅装を解いた総二階の〝楼〟があったとはとても思えない。

島根町加賀。江戸時代から明治にかけて北前船などの寄港地として栄え、船宿や風呂屋などが数十軒あった。写真(左)は、船頭らが酒盛りし、女たちの歌や三味線で英気を養った「付け船宿」で、「山ン空」と呼ばれた高台にあった。八雲は明治中ごろ、加賀の潜戸見物の際に投宿し、様子を書いている。

「戸口も障子も窓も、およそ宿屋の開いているところはみな、私を見に集まった人々で真っ黒にふさがってしまった。皆黙ってにこにこして見ている……」

町誌によると、この約十年後、二階建てに新築、離れ座敷も建て増し、「吾妻楼」と金で書いた看板を出した。昭和の時代、おかみは〝キワさん〟と言った。「宿の女の人たちが二階から顔をのぞかせ、幼いころ、よく遊んでもらった。キワさんは安来節や博多節が抜群にうまくてねえ」。元タンカー船員で、潜戸のガイドも務める遊覧船長、山田治さん(77)は言う。

近くに住む田中美穂子さん(61)も覚えている。「キワさんは、歌でも三味線でもきちんと修業した粋な人でした。そのキワさんに聞いた話では、八雲さんは泊まる度に半紙に何かを書き残し、それが押し入れの隅に束で置いてあった。でも、焼いてしまったんですって。残念ですけどねえ……」

「ラフカディオ・ハーンが滞在した宿」。撮影者のフリッツ・カルシュが、アルバムにそう書き添えた建物は、港町がにぎわいを失っていってもキワさんが一人守り続け、十数年前に取り壊された。目を閉じるとどこからか、三味線の音が聞こえてくる気がした。

◀(左)小泉八雲も滞在したという島根町加賀の宿（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）(右)建物は取り壊されたが、石塀と階段が往時をしのばせる